

ラダン大佐 横田基地・第374空輸航空団司令官就任から一年 *Yokota commander marks one year of leading the 374th Airlift Wing*

August 4, 2023

By Tech. Sgt. Taylor A. Workman
374th Airlift Wing Public Affairs

第374空輸航空団司令官アンドリュー・ラダン大佐は6月26日、メディア・デーを開催し、基地司令官としてチーム横田の空兵を率いてきた一年を振り返り、同航空団の任務に対する地域の人々の支援に感謝の気持ちを表した。

メディア・デーでは、第374空輸航空団のこの一年の数々の実績が語られた。その例に、コミュニティ活動、人道支援、インド太平洋地域管内の同盟国日本とパートナー国とのさまざまな活動がある。

ラダン大佐は、「第374空輸航空団の司令官として、素晴らしい空兵と民間従業員のチームを率いることができ光栄に思う。地元地域との関係強化を図るため、日本のパートナーや地域のリーダーたちとさまざまな取り組みに邁進してきた。また自衛隊の仲間との協力関係は極めて重要であり、特に日本の防衛のために連携でき、とても充実していた」とコメントを述べた。

そして、ラダン大佐は横田基地の地元コミュニティとの継続的な交流が、月例のファーマーズ・マーケットや基地内外のコミュニティ・イベントを成功に導いたと強調した。

今年の開放行事は、地域社会との繋がりを象徴するものだった。4月の「サクラ・スプリング・フェスティバル」には約7千人の来場者が訪れ、日米のリーダーが壇上で挨拶したほか、さまざまなパフォーマンスや文化交流を楽しんだ。また、基地最大の恒例開放行事である「日米友好祭」も、今年は来場者数を大幅に増やし、史上最多の約19万3千人に達した。

またラダン大佐は、日米の民間従業員と契約業者の協力なくして基地の任務は成功し得ないことを強調した。

「空輸から、整備、使命支援を担うチームに至るまで、空兵と民間従業員が基地任務の重要な一翼を担っている。同航空団のチームは多才で多様性に富み、世界中から集まったメンバーが一丸となって同航空団そして米国のための任務にあたっている」

続けて、ラダン大佐は地元コミュニティの理解と支援にも感謝の意を示した。日本のコミュニティと継続的な交流を進めていくことの重要性を強調し、交流は良好なパートナーシップを構築するための鍵であると語った。

「横田基地は、隣接する5市1町の自治体のリーダーをはじめとし、地域と強い絆で結ばれている。こうしたパートナーシップと協力関係は、今も将来も極めて重要である。開放行事の参加者数は、基地任務に対する関心の高さを表している。基地一同、日本の友人と隣人の支援に感謝している」と述べた。

横田基地には、管轄地域内のパートナーや同盟国と協力する機会への招待が数多く寄せられており、横田の幹部は、運用ペースを維持しつつ、パートナー国の軍と統合的な運用をさらに進めたいとしている。

第374空輸航空団：横田基地に置かれている米空軍の部隊。太平洋空軍司令官に対し、C-130J、UH-1N、C-12Jによる戦術空輸、空中投下、航空医療搬送、高官輸送等の運用責任を担う。平時と有事における西太平洋の主要な空輸のハブとして、第374空輸航空団は太平洋地域管内の国防総省の機関へ人員・物資の移動および郵便業務のための空輸を提供し、また関東平野および都内において人員や機材の輸送を担う。平時には、さまざまな合同訓練に参加することにより即応態勢を常に維持している。

